灯影怪談

みくも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
灯影怪談

【Ｎコード】
Ｎ４９５９Ｋ

【作者名】
みくも

【あらすじ】
明治十年。咲田は新聞で見つけた霊能者を求人する広告に応募する。依頼主の城之森家には怪しい面々が招かれていた。雨に降り込められた屋敷の中で、次々に不可解な死人が出るが……。

一ノ一

明治十年。

最後の幕府軍が函館で倒れたのはとうの昔。

新しい時代を拓いた男が反逆者として九州で死に、新しい時代にようやっと成った。

そう言う年の事だった。

城之森（しろのもり）家を訪れたのは、初秋だったか、晩夏の事か。

ちょうど季節さえも曖昧な、そんな頃だった様に思う。

生涯の内、たった七日。

俺がこの家の中に身を置いたのは、思えばただそれ程の短い時間でしかなかった。

＊

その室内は造作も調度も、西洋の様式で統一されていた。

幾つものランプや燭台から投げ掛けられる橙を帯びた灯りが、とろとろと揺らめきながら空間を満たしている。

「あぁ、お揃いのようだ」

俺が部屋に入って行くと、そう言って実に優雅な所作で椅子から立ち上がった。

その男性を、城之森秋良（あきら）と言う。黒羽二重の上等な羽織に家紋を五ヵ所染め抜いて、漆黒の長い髪を絹の組紐で束ねた美丈夫だ。

客のためか、普段からこうなのか。

一同が集められた居間らしき一室には、沢山の椅子がそこかしこに置かれている。ビロードで飾られた長椅子から、背凭れすらない一人掛けの物まで様々に。

それらの殆どは、少なくとも今ばかりは懸命に自らの仕事を全うしようと、客達の尻を支えて頑張っている様だった。

空いた席を探そうとすると、長椅子に一人腰掛けた津和蕗が手招きで呼ぶ。親しげな様子に一瞬だけ戸惑ったが、俺は促されるまま彼の隣に座らせて貰う事にした。
居間の中の視線が全部、着席するのを苛々と見守っていたからだ。最後の一人である俺が席に着くのを待って、それらの視線は秋良氏の元へと集まる。
俺も皆と同じに眼を向けながら、それでも無意識に雨音の激しさに気を取られた。
この洋室の天井は高かったが、玄関広間に設けられた二階分の吹き抜け程では流石にない。その分こちらは、上の階があるせいだろうか。玄関よりも雨音が遠く感じられる。
それでも空気は絶えず微かに震えていた。貝殻だか茶碗だかを耳に当てた時に似た、不思議な雑音がどこかしらに染み付いてしまっているふうだ。
どうにかそれの中から秋良氏の声を聞き分けようと、俺達は耳を澄ませた。
年若い主役は我々の視線を一身に受けながら、臆する様子を欠片さえ見せず堂々としている。彼はまず、羽織の袂からするりと手を覗かせた。その揃えた指先で、好き勝手にそれぞれ座った客人達を一人一人指しながらに名を諳んじた。
その通りに羅列しよう。
一人目の人物は、真白な髭が見事な翁。
「こちらは、医師の藤永斉庵(ふじながせいあん)先生」
緑の深い砥草色で羽織と着物を対に仕立て、袴を着けた足元には往診に用いる持ち手付きの薬箱が見えた。
「警視庁からお越し頂いた都祁(つげ)様、松野(まつの)様」
声に合わせ、厳めしい紺羅紗の制服に身を包む男性二人が会釈する。彼等の膝には制服と同じ羅紗生地の帽子が載せられており、それぞれ色の違うモールが付いていた。見る者によってはこの色で壮年の都祁が警部、これより若年の松野は巡査と知れた。

都祁は西洋ふうに拵えた官給品のサーベルを佩き、更に腰の革サックにはピストルが隠れている。対し、松野は腰に三尺五寸の樫の棒を差した切りだ。
「祈祷師の飛根井葉（ひねしょうよう）様、助手の裕洞（ゆうどう）様」
名を呼ばれて、井葉は一同の顔を確かめる様にくるりと眼を向けただけだった。
この人は身なりばかりは僧形だが、真っ赤な紅に唇を染めた、明らかな女性だった。胡散臭い事この上ないと俺は思うが、その脇に控えた裕洞と言う男も負けていない。髪を剃り落した坊主頭の大男で、雲を突く様な巨躯に薄汚れて垢染みた着物を胴に一枚巻き付けたきり。こちらも充分に素性が怪しい。
内心で首をひねる。
上等の着物に身を包んだ、秋良氏の涼しげな顔をそっと盗み見た。こんな怪しい人間を何人も家に招き入れるなど、一体どんなつもりだろう。
そんな事を考えていると、当の秋良氏が俺を指す。心中を見抜かれた思いがして思わずギクリと心臓が跳ねたが、何の事はない。順番が来ただけの事だ。
「霊能者の津和蕗（つわぶき）様、そしてお隣が咲田（さきた）様」
と、並んで長椅子に腰掛けた俺達二人が、一揃いの様にポンポンと紹介された。
肩書きのない俺の名前を言い終えると、秋良氏は一度区切るふうに言葉を止める。
そして「こちらは知人の」と断った上で、まだ紹介されていない二人の名を口にした。
「磯村（いそむら）氏と、大内（おおうち）氏です」
つまり彼等二人を除いた他は、全て今回のために集められた人間と言う事なのだろう。
秋良は最後に、自らを含めた館の住人について触れた。
「現在、城之森の家の者は私と妹だけですが、妹は体調を崩して近

頃は殆ど臥せっております。ご容赦下さい。他には、使用人が四人おります。これにはどうぞ、何なりとお申し付け下さい」
「秋良さん」
焦れた様子で、呼んだのは磯村だった。
彼はまだ、十代ではないだろうか。
きっちりと梳き分けた断髪と堅苦しい紋付袴が、純朴そうな青年に残る幼さを強調していた。
話の途中に口を挟まれた格好になったが、秋良は気を害したふうもない。険のない眼で磯村を見る。
「炯乎さんは、お悪いのでしょうか」
腰掛けた袴の膝に固く握った拳を置いて、身を乗り出さんばかりの勢いで問う。
恐らく、臥せっていると言う秋良氏の妹の話だろう。必死さの滲む磯村の姿に、俺は炯乎嬢への興味を覚えた。
「ご心配には及びません。とは言え、病人に変りはありませんから、大事を取って皆様の前に出るのは遠慮させております」
興味を断ち切る様に、磯村を諦めさせる様に、秋良はきっぱりと言った。
そう説かれては、磯村は渋々ながらも引き下がるしかないだろう。だがどうにも心配らしく、ずれてもいない眼鏡に手をやって、ものいいたげな表情で相手を見詰めたまま動かない。
その真っ直ぐさと言うか、健気な様子を見ていると、どうにもこの磯村青年は好ましい人だと俺には思えた。
「見舞って差し上げたいな」
今のやり取りを見ていなかったのかと、疑いたくなる様な気安い調子で口が挟まれた。声の主は、主人役のすぐ脇でゆったりと足を組み、見るからに尊大な風体の大内氏だ。
年は秋良と同じく、二十代も後半と言う頃だろう。この人は洋装であったが、海老茶の上着は釦も掛けず、シャツの襟にはタイすらなかった。

近頃では市井でも洋装を見る様になってはいたが、まだまだ高価で貴重な存在だ。その背広をこんなにだらしなく着る人も、ちょっといない。

秋良は少し責めるふうに、眉を顰めた。

「あれはまだ子供の様なものだが、男の君が寝所に訪うのは感心しないね」

「随分だな。妙な事はしやしないさ」

責められて、しかし本人は悪びれない。

「こんな時は誰か、気を紛らせて差し上げるのがいいんじゃないかね。思えば、こちらへ寄せて貰うのは久しぶりなのだし。まぁ、それでなくたってあの姫君にはお目に掛かりたいものだけどね」

「ははぁ。どうやら、炯平姫は随分とお綺麗な方の様ですねぇ」

ひょいと口を挟んだ津和蕗に、大内は意外な程に気安い調子で「そりゃぁ、もう」とニヤリと笑う。

「兄上のお顔を見れば、大体の想像が付くだろう？」

「実千綱（みちつな）！」

どうやらそれが名前らしい。ピシャリと咎めた秋良の声に、降参、とでも言う様に大内は軽く両手を上げた。

不機嫌そうな、迷惑そうな顔でそれを見て、ため息を一つ。

「話が、妙な方へ逸れてしまいましたね」

「妙なものか」

混ぜっ返す大内を軽く上げた手で制し、秋良は、その表情をスッと改める事だけで場の空気を神妙なものに変えた。

「ではこれより、本題をお話する事に致しましょう」

その言葉に我々もまた居住まいを正し、再び注意深く耳を傾けた。

一ノ二

――さて、事の始まりである。
全て、と言うのは難しい。だが少なくとも、俺がこの日に城之森家を訪れた因果はここにある。
五日程前、ある新聞広告が小さく打たれた。
「豪胆無比、勇猛ノ徒求ム。霊験ノ者、武芸至人歓迎。謝礼即納、功ニ応ズ」
以上が全文。
この風変わりで怪しげな求人に、名乗りを上げた者は一体どれくらいいただろう。
結果として井葉、裕洞の様な人間も紛れ込んでいたのだし。人材に信頼と信憑性を求めるなら、余り巧い手ではなかっただろう。
……いや、それとも、もっと以前。もっと重要な人選から、誤りがあったか。
紙面を見る限り、広告主は匿名だった。このため求人に応募するには、まず新聞社に連絡を取らなければならなかった。
実際に俺がそうすると、担当者は俺に広告主の指定する代理人を紹介した。どうやらその代理人、平五郎と言う老爺の面接を経て採用の可否が決まると言う事らしかった。
そうして俺が新聞社から紹介された代理人を訪ねたのは、今日も今日。城之森家の瀟洒な居間で、他の人々と顔を合わせる数時間前の話でしかない。
代理人とやらが住まうのは、ごめんよと一声掛けて戸を引けばもう何もかもが丸見えの一間しかない貧乏長屋。当の本人はと言うと、草履を足に結わおうと手前の土間に屈み込み、顎だけひねって「あいよ」と気の抜けそうな返事をするのがそれだった。
俺は意表を突かれ、うっと怯む。
こっちを見上げる平五郎老の、髷に結った髪の大半は灰色で、よ

ぼよぼと痩せ、着ている着物はどこか垢染みて粗末だった。
正直なところ、代理人などと言う大層な肩書きにはそぐわない。そして実際、話してみれば実直と言うか、愚直と言うか。人の話を一から十まで丸々信じ、疑わない。憎めない人ではあったが、今回の役目には極めて不向きな人物でもあった。
あんな怪しげな広告に応募して来る胡散臭い人間の善し悪しを、見極めなくてはならないのだ。疑う事を知らなくて、それが務まる訳がない。
だからもしかするとこの老爺、応募のあった人間は全部通してしまったのではないだろうかと疑念が湧く。
しかも訪ねた時に代理人は余っ程急いでいたらしく、俺が求職に来たと知ると困り果てた顔を見せた。聞けば、これから依頼主の所へ参じる事になっているのだそうだ。
「これが仕事納めでね。お前さん、今すぐ付いて来られないなら、もうそこへ行ける時はないよ」
と、早口に捲し立てた挙句、本当にそのまま俺を放ったからしてさっさと歩き出してしまったのだ。
これでは、可否も何もありやしない。
事の運びが余りにも性急で、俺は着の身着のまま着流しに草履を突っ掛けた、普段と変らない出で立ちで平五郎老のあとからてくてく付いて歩く事になった。
その存外しっかりした足取りの道すがら、訊けば今朝急に依頼主から使いがあったのだそうだ。
今日を限りに求人はいいから、遅くとも夕刻よりも前に屋敷へ足を運ぶ様にと。そんな指示があったから急いでいたのだと納得し掛けたが、それにしたってまだ陽は高い。どこまで行くつもりなのだろう。
行けども行けども立ち止まらずに、やっと足を緩めて「ああ、見えた見えた」と声を聞いたのは、本当に夕刻近い事だった。
やれやれと顔を上げれば、東京とは名ばかり。山裾近い最果ての

荒地だ。
——のちに、明治維新と呼び換えられた。
その動乱がようよう迎えた終結を以って「御一新」とされたのはもう十年も昔の事。
俺はやっと十二の子供だったたが、あの虚脱感を今も忘れてはいなかった。
国が変わると言う事。変貌すると言う事。
足の下にある地面の様に、信じて疑わなかったものがふっつりと消えてなくなる。
あらゆるものが、是非もなく。
この転機に、文字通り一新された最たるものが江戸である。明治の年号と頃を同じく、江戸は東京。いつの間にかに帝都と冠した。
その地にあって、その最果て。
城之森の館へ続く道の脇は荒涼と、雑草が好き放題に根を張っている。その中に時折ひょろりひょろりと生えた木々が、軟弱な枝を天に伸ばしているのが見られた。それも尽きると地面はゆるりと隆起を始め、ふらふらと高低しながらどこを境とも知れないままに深い山々へと連なってしまう。
この土地には、何もない。
だからそれは、幻の如く。
山肌の木々は吹き荒ぶ強風に枝葉を鳴らし、ザブンザブンと波濤の様に激しくうねる。いつの間にか、妖雲とでも呼ぶに相応しそうな気味悪く重たい雲が、天を黒く覆って垂れ籠めていた。
俺達は空を仰いでは足を速め、時折確かめる様に行く先を見た。
その印象を、何と言おう。
雨雲の落とした薄闇の中に、ふっと沈んでしまうかに見えた。どこか仄暗いその姿は、うら寂しさを漂わせるかの様だ。
——ああ、やはり、何とも言えない。
とにかくそこに城之森家、白亜の洋館は存在していた。
歩いて、歩いて。平五郎老と俺は、何とかやっと目的の館へと辿

り着いた。
　しかしその時には二人とも、頭の天辺から足の先までずぶ濡れになってしまっていた。これではまるで、濡れ鼠だ。
「やれやれ、やっとだ」
　そう言って、門前で安堵の息を吐いたのはついさっきの事。けれどのその途端、肩先にポタリと雨粒が落ちた。
　遂に来たかと、空を確かめる余裕もない。
　突然ザンザンと刺す程に痛い大粒の雨が降り注ぎ、俺達はほうほうのていで館の中に転がり込んだ。
　激しい雨音が中まで響いてはいたけれども、館の中は嘘の様に明るく、穏やかだった。
　玄関広間の大きなランプには灯が入り、ほっとする色をそこら中に落としている。だがその明々とした中で見る、べったりと濡れて黒ずんだ着物と、それを体に貼り付かせた自分達。このあり様と来たら、情けないと言う他にない。
「参った」
　図らずも声を揃えて呟いて、俺達は同じ調子で嘆息した。
　門前までは来ていたのだ。だからそう長く、雨に打たれてはいない筈。なのに着物の端からは、次々に水が滴り続ける。見る間に俺達の足元には水溜まりが出来てしまって、磨き込まれた板張りにどんどんと水が広がった。
「おやまぁ、平五郎さん」
「あ、こりゃあどうも。お恥ずかしい」
「いやいや、これは大変だな。待っていて下さい。人を呼んで来ましょう」
　急に始まった立ち話に、驚いて眼を上げる。と、いつの間にやらすぐ傍に、洋装のすんなり似合った男の姿。
　どうもやたらと結構な身なりで、育ちのよさそうな人に見えた。だからこそ驚いてしまったのだが、元々、そう言った事に頓着しない性分なのだろう。慌てて止める平五郎を置き去りに、ふいっとい

なくなって本当に女中を連れて戻って来た。
小豆色の着物の女中は俺達を一目見るなり「あらまあ」と声を上げ、くるりと踵を返して姿を消す。雑巾でも探しに行ったか。
その場には三人。濡れ鼠が二人と、乾いた男が一人残された。
この男が、津和蕗だった。
客分の津和蕗に女中を呼びに行かせてしまった事を平五郎はしきりに謝ったが、本人は何を謝られているのか解っていない様に見えた。
津和蕗が首を傾げて、沈黙が落ちる。そうなると、屋根までの吹き抜きに造作された玄関広間の上方から、雨音が細かに空気を揺らすのを感じた。
「平五郎さんと一緒と言う事は、あなたも新聞を見ていらしたんでしょうね」
三人揃ってわずかばかり雨音に気を取られた後、その中でも耳に届く様に少し大きな声で津和蕗が言った。
いまだ自分の体からポタポタと水が垂れている俺は、出来るだけ身動きするまいと注意しつつ口を開いた。
「ええ、そうですが。平五郎じいさんをご存知とは、まさかそちらも？」
「はい」
彼は何とも端正な顔で、にっこりと笑った。その笑顔と肯定に、少なからず驚かされる。
わざわざ「まさか」と言ったのは、どうもこの人があの怪しげな新聞広告に応募する理由が全く以って見えないからだ。
俺は改めて津和蕗の姿をまじまじと確かめる。年は俺と同じくらいだろうか。だとすれば、二十二の前か後と言う事になる。けれども俺は、とってもこんなふうには笑えない。
少々長く、不思議にうねる断髪も、その身を包む三つ揃えの背広も、同じに甘い胡桃色。立ち居振る舞いも柔らかで、これはどうも、良家の子弟にありがちな退屈凌ぎの酔狂かも知れない。

「旦那。こちらは津和蕗様と仰って、アタシがご案内したんですよ」
色々と想像を逞しくする俺の横腹を突っついて、どこか自慢げに平五郎が胸を張った。けれども驚いたは、違う所だ。
「え、こちらまで？」
「はい。平五郎さんは、ご苦労なお役目なんですよ。応募があると、毎度毎度こうして送っていらっしゃる」
「ええ、ええ。ですけども咲田の旦那を含めて、お三組しかご案内してませんので」
「はあ、そりゃあ難儀だ」
俺は散切りの前髪が自分の額に貼り付くのを、後ろへ撫で付けながらに嘆息した。
今来た道を、もう既に二往復半！
考えただけでうんざりじゃないか。
「年寄りには、酷な仕事だったんじゃないですかねえ」
「何、まだまだ！」
俺の叩いた軽口に、平五郎老が鼻息荒く胸を叩く。
津和蕗はそれを見て、「仲がいいな」と面白そうに笑っていた。
その後ずぶ濡れの二人は、戻った女中に伴われ、用意された部屋へと通される事になった。着替えをしていいとの事だが、当然、手ぶらの俺は着物も借りる事になる。
申し訳ない、などと話していると、女中とのやり取りを聞いた津和蕗が少々妙な顔をした。
「何です？」
「やぁ、驚いて」
「そんなに驚く事ですかね」
「何もお持ちじゃないから」
「はあ。まさか、こんな目に遭うとは思わずにいたもんで」
「いや、えぇと。そんな意味では」
ちょっと悩む様に、津和蕗は頭を傾ける。
「こう言った場所柄ですから」

「はあ、そうですか」
「はい」
津和蕗は俺の気のない相槌に、こっくりと生真面目そうに頷いた。
何の事か俺にはさっぱり解らなかったが、けれどもいい加減、濡れたままは寒い。とにかく着物を替えたくて、話はそこそこにして別れてしまった。

一ノ三

本題を語ると宣言して、城之森秋良はしかし、わずかに沈黙した。
俺は津和蕗の隣で長椅子に座り、袂の中に腕組みしながら少し猫背にそれを待った。
思案深げに伏せられた瞼の下で、視線はどこへともなくさ迷っている。秋良は酷く慎重に、言葉を選んでいるのかも知れなかった。
やがて、決した様に。
「まず――」
薄い朱の灯火がゆらゆらと、その人の姿を照らしている。
「まず、お願い申し上げます。これより七日、どなた様も外へはお出になりませんように。外出は勿論、庭へ降りるのもお控え下さい」
刹那、「七日！」と叫んだのは井葉だが、俺も似た様な気持ちだった。庭へ降りてもならないとは。
「それは？」
理由を問うのは都祁警部だ。
「当家に伝わるしきたりです」
「しきたりって申しましてもねぇ」
「えぇ、当然」
明らかに苛立つ井葉を、秋良は微かに頷く事で抑える。
「故あっての事。当家は本日より七日、喪に服さねばならないのです」
俺は思わず、あっと声を零した。
先程「知人」と秋良が紹介した二人に、眼を向ける。こんな時――と、大内は口にしなかっただろうか。磯村青年の正装は、弔問のための配慮ではないか。
「亡くなったのは母ですが、当主を務めておりましたので」
続けて説明する秋良に、斉庵医師が頭を下げる。
「これは、お悔やみを」

「恐れ入ります。しかしながら特に葬儀は致しませんし、皆様どうぞお気遣いなく。平素のままお過ごし下さい」
彼はそこで、チラと自らの横を見る。
「承知していても、この様に整わぬ者も居りますし」
「心外だな。取る物も取り敢えず駆け付けたと言って欲しいね」
すかさず減らず口を叩く大内に、まるで「ほらね？」とでも言うふうに秋良は他の客達に薄く笑んで見せた。
「では、現在のご当主は秋良殿であると了解して宜しいのですね？」
冗談を解さない松野巡査が、確認する様に口を挟む。けれどもそれは、即座に否定された。
「さきほども申し上げました通り、亡くなりましたのは当家の主でございました。しきたりでは当主の没した日の日暮れから七夜、門戸を閉ざして過ごしたのち、七日目の朝に新たな当主のお披露目をする事になっております」
「このしきたり、廃する訳には行きませんかね」
ついぽろりと、本音が出た。
皆が一斉にこちらを見るのには参ってしまったが、でも、そうは思わないか？
家族が喪に服すのは当然としても、何故人の出入りを禁じる事があるだろう。そんなの無意味だし、困るではないか。
至って真剣なつもりでそう訴えたが、脳天気そうにでも見えたのだろうか。秋良はふっと笑い、まるで道理でも言い含めるかの様に俺に言った。
「まだ申し上げておりませんでした。このしきたりは先代の喪に服すと同時に、代替えの儀礼の意味もございます。そうそう曲げて差し上げるわけにはまいりませんが、もう一つ、言い伝えの様なものがございまして……」
「言い伝え、ですか」
「左様です。前の代替えは私の生れるより昔で、真偽のほどは定かではありませんが。城之森の代替えには、変事ありと言われて居り

ます」
　変事。
　それを聞いて、「はっ？」と素っ頓狂に裏返った声を上げたのは、驚いた事に俺だけだった。
　他の客達は、落ち着いたものだ。
　どうして驚かないのだろう。充分に馬鹿げた話ではないか。
　俺は、秋良に確かめずにいられなかった。
「それを、信じておられるのですか？」
「……難しいご質問です。ただ、気に掛けてはおります。仰る通り、客人や使用人の出入りまでを禁じるしきたりは厳しいもの。無意味に思えながらも今日まで残るのは、故あっての事やも知れぬと。ですから、皆様にご助力願いました」
　ああ、成程。
　思えば当然のところを、「ですから」と説かれてやっと得心した。誰も驚かない訳だ。皆、このために呼ばれたのだから。
　怪しげな祈祷師。自称、霊能者。不測の事態に備え、医師と警察。何もないなら、こんな面子を招く理由はどこにもない。
「母が亡くなるのは、時間の問題でしたので……。覚悟はできておりましたが、変事とは何かと少々気掛かりだった事も事実」
　だからいよいよとなった時、あんな広告を出した。
　医学と法の協力を得るのは、恐らく苦労しなかっただろう。彼等はちゃんと、どこにでもいる。けれども拝み屋なんて、一体どうやって見付ければいいのだろう。
　我が咲田家が代々世話になっている菩提寺の住職はいい人だが、幽霊退治が出来るとは噂にも聞いた事がない。でも寺の坊主なら、念仏と説教の文句さえ頭に入っていれば充分と言うものだ。
　確かに、拝み屋やまじない師に頼るのを好む者も少なくはない。だが俺はいまだ、霊威を証明して見せてくれた者にも、神や仏の存在を信じさせてくれた者にも出会った事はない。
　そして特別な力や、奇怪な事柄を看板に掲げている人間は、どう

も信用出来ない者ばかりの様に思えて仕方ない。
それだけに、俺は一層そう言ったものに懐疑的にならざるを得ないのだ。
それを考えると、この場に居合わせた事さえ憂鬱になる。
が、ふと思い当たった。すぐ隣で柔らかに笑う、胡桃色の男。そう言えば、この人も霊能者なんて肩書きだったな。
最後に、秋良が言う。
「何もないであれば、それで構わないのです。むしろ、私の杞憂であってくれれば良い。しかしながらどうかご滞在の間、少しばかり心に留めて頂きたいのです。そしてもしも、万が一の折には、当家の者を守る為にご尽力を賜りたい」
どうか。と深く下げられた頭が、鬱々とした胸には重たかった。
話を終えて秋良が退室してしまうと、客達もそれぞれバラバラに散って行った。
空の椅子ばかりが残る居間には、俺と津和蕗と、磯村だけが何となく留まっていた。
津和蕗は、言葉なく微笑している。
これはたった今発見したが、彼には不思議に厭味な所がない。恐らくこの笑顔も、別の人間では同じ様にしてもニヤニヤと人の悪い笑みになるに違いない。
俺はそれを見ていると何だが段々と腹が立って、せめて先に自分で言ってしまおうと思い切った。
「あんた、俺の事を馬鹿だと思ってるでしょう」
「いやいや、とんでもない。何とも豪気な方だなぁと、感心をね。それより、よい着物を貸して頂きましたね」
心にもない事をしゃあしゃあと言ったかと思うと、彼はヒョイと首を伸ばして俺の背中を覗き込んだ。
落ち着いた藍色の、美しい絹で対に仕立てた羽織と着物。その背には一つだけ、秋良の羽織に染め抜かれたのと同じ図柄の紋がある。数こそ違うが、この着物が城之森家の持ち物だと言う証だ。

しかし、これより質素な着物はないものだろうか。借り物だと言うだけでも落ち着かないのに、こうも上等の着物だと尚の事、肩が凝って敵わない。
ああ、もう。嫌になる。
「いいんです。俺も自分で馬鹿だと思ってるんですから」
「なら、しかたないですね。認めましょう」
「やっぱり思ってたんじゃないか！」
「あはははは」
津和蕗は笑って誤魔化したが、こっちは文句を言えた義理じゃない。実際、馬鹿だ。
何が起こるが解らない、津和蕗の言を借りれば「こう言った場所柄」に、俺は刀の一本も持たずに来てしまったのだから。
昨年の廃刀令からこちら、帯刀しての外出は禁じられた。だが腰に帯びず、何かの荷物に紛らせてしまえば咎められる事もない。この家にも持ち込めた筈だ。
まあしかし、それは幾らかの猶予があればと言う話だ。例え出発時に事情を知らされていたとしても、あの平五郎老の慌て様では自宅から荷物を用意して戻るまで待ってはくれなかっただろう。
「やあ、それは冗談ですが」
すっかり肩を落とした俺を気遣ってか、今更何の慰めにもならない前置きをして津和蕗は言う。
「今も不思議な気はしますね。何故、あなたの様な人がこちらへいらしたのか」
「俺の様な、ですか」
「うん。えぇと、説明するのは難しいな。一口に言ってしまうと、僕好みなんですよ。咲田さんは」

一ノ四

癖なのだろう。
少々伸び過ぎて目元に垂れる前髪を、津和蕗は長い指で撫でる様によける。
その仕草を見ながら、何を言い出したんだろう、この人は。と思う。
どうしたらよいか解らない。部屋の片隅で大人しく座る磯村に、視線をやって助けを求める。だが彼も丸い眼鏡を直し直し、拙い事を聞いてしまったと言う顔でブルブルと頭を横に振った。実に真っ当な反応だ。
何とも言えず、じんわりと沁みる様な何かを感じて額を押さえた。そうして、いつか誰かこの男に、冗談と言うのは面白いから冗談たり得るのだと教えなくてはならないな、と考えた。
「津和蕗さん、勘弁して下さい」
「あ、失礼。変な意味で言ったつもりはなかったんですが」
「いや、言った事が既に変です」
そんな事ないですよ、いや変ですと俺達が言い合っている内に、脇で磯村が立ち上がった。
「どうしました？」
見れば戸のない入り口に、女中の姿がある。芥子色の着物だから、さっきのとは別の女中だ。磯村は何やら言葉を交して、「ああ、そうか」とこちらに振り返る。
「お食事なんですが、どうされますか。あちらの食堂でお取りになるか、それとも部屋までお持ちしますか」
「いや、どちらでも」
「それなら僕に付き合ってくれませんか。ここに来て二日ですが、連れがなくてまだあの食堂を使った事がないんです」
そうした津和蕗の希望によって、俺達は食堂へと移動する事にな

った。
　居間から食堂へは、玄関広間を挟んですぐだ。と言うのは、この建物は上から見ると凹の様な形をしていて、両脇の棟が底の部分に当たる玄関で繋がっているからだ。
　だから食堂と居間は左右の棟にそれぞれ分れ、玄関の左に食堂、右に居間と、それぞれの壁に対面する形で出入り口がある。
　因みに、その玄関広間の中央からは二階への大きな階段が伸びる。上った正面、漆喰の壁には大窓が切られ、ステンドグラスがはめ込まれていた。そこから左右に手摺り付きの通路が広がり、壁際まで行くと家の形に沿って奥向きに伸びた廊下に繋がる。二階は左が客室、右が主達の私室となっているそうだ。
　しかしこの洋館、しつらえは立派だが規模はそれ程でもないらしい。客室だけでは数が足りず、現在は私室の一部も客に明け渡されていると聞いた。
　それらを教えてくれたのは紋付袴の大仰な格好で、二人で使うには大き過ぎる食卓に食器や灯りを並べ、料理の皿まで運んで準備を整えてくれた磯村だった。手伝う隙もない程によく動く。
　折角だから一緒に食べようと誘ったが、冗談か本気か、「お邪魔ですから」などと危険な事を言ってそそくさと行ってしまう。
　そうしてみると、津和蕗が「連れがなくて」と言う意味が解る気がした。食堂も居間と同じに真四角で、畳に直すと二十畳に少し足りないと言う所だろう。真ん中に大型の食卓を置き、何脚もの揃いの椅子でその外郭を取り囲んでいた。けれどもその広い食堂にいるのは、俺達二人だけなのだ。
　これで一人きりだったら、寂しいを通り越して寒々しいと言うべきかも知れない。
　津和蕗のどこかとぼけた馬鹿な話に付き合いながら食事を終えると、いつの間にやら夜も深く、すっかりと更けてしまっていた。何だか疲れてもいたので、もう大人しく部屋に下がろうと言う事になった。

二階の客室に上る津和菭と分かれ、俺は階段上から左右に伸びる通路の下。一階の壁に切られた戸を開ける。その先は棟に沿って奥へと伸びた真っ直ぐな廊下だ。
この屋敷は、ご丁寧にも通路にまで戸があるのだ。これは二階の廊下も同様で、だから階段を上った通路の上下、左右両端の壁には同じ様に奥へ伸びた廊下の為に四枚の戸が設けられている。
俺に与えられた部屋は一階で、居間側の棟の一番奥。そこへ通じるのは階段から右下の戸だ。
その廊下の距離を言うなら、戸口から向こうの端まで畳を縦に四、五枚敷いた程しかない。着替えのため夕刻ここを通った時に、そう確かめていた。あの時も厚い雨雲に薄暗くはあったが、今は一歩先も見通せない真っ黒な影しか見えなかった。
廊下の左手は中庭に面し、窓がずらりと切られていた。けれども幾つも並ぶその硝子さえ、今はただただひたすら暗い。
ザアザアと、忘れていた雨の音が身近に聞こえて来るばかりだ。
「ああ、そうか」
不意に思い当たり、戸を開け放したまま玄関へと引き返す。
本当に飛び込みの客だから、俺の部屋には何の準備もなかった。夜になったら燭台の一つも貰わなくてはと、着替えながらに考えていたのを思い出したのだ。
もう階段を上って二階の通路にいた津和菭が、戻った俺を不思議そうに見下ろした。手摺りに寄り掛かった彼に、説明する。
「いや、灯りがなくてね」
「それならその引き出しにあるはずだよ」
納得した様に軽く頷き、言ったかと思うとスルスルと階段を下りて来た。迷いのない歩調で居間の入り口へ行き、壁際の棚に寄る。
その引き出しから華やかな柄の描かれた絵蝋燭を探し出して、一緒に見付けた燭台に立てる。そして傍のランプの火を移してから、どうぞと俺に差し出した。
随分と親切だ。感じ入ると同時に、やはりこの人は身分ある人で

はないかと考えていた。何をしていても爪の先まで端正で、所作に洗練を感じるのだ。
それに蝋燭の事もある。高価そうな絵蝋燭に、惜しげなく火を点ける。やはりそれは、普段から惜しげなく使い慣れた人間の様に思うのだ。俺などには脅しにしか見えない豪華な絵柄も、この人にはただの飾りなのだろう。
「どうも有難う」
燭台を受け取って頭を下げると、津和菭は笑いを含んで「はい」と答えた。津和菭と話していると、何だか妙な調子になる。
実は居間の中には松野がいて、戸のない入り口辺りでごにょごにょとしている俺達に、呆れたふうな視線を寄越しているのだ。やはり、大の男がする会話ではないのだろうか。
灯りを手に入れ、今度こそ津和菭と分かれる。先程開け放したまま戸の中へ、自分の部屋に向かう暗い廊下へと足を踏み入れた。
後ろ手に戸を閉めると、明りは手の蝋燭一本になった。ふわふわと揺らめく灯火は頼りなく、しかしほっとさせる色でもあった。
二、三歩も行くと、明りの中に洋式の戸が唐突に行く手を遮った。首を傾げる。行き止まり、ではない。廊下の途中で、手前の部屋の戸が開け放たれているのだ。
この棟の一階には、部屋は二つ。俺の部屋が奥で、手前が平五郎に割り当てられた。
そう言えば、お互いずぶ濡れの着物を替えようと、夕刻ここで別れたっきりだ。どうしたかなと、声を掛けつつヒョイと戸の中を覗き込む。と、平五郎はすぐそこにいた。
ただし、床に突っ伏した格好で。
これはもう……。
遅い。
確かめるまでもなく、一見してそう直感したが、俺はそろそろとしゃがんで平五郎の手に触れた。
袖を二の腕まで捲れ上らせ、投げ出された手の先はぞっとするく

らい冷たかった。
「松野さん！」
戸を一枚隔てた程度。距離にしたらすぐそこにいる筈の、巡査の名前を大きく呼んだ。叫べば、聞こえない訳はない。けれども呼んだ時にはもう、我知らず駆け出していた。
手の中の蝋燭がすぐに消え、辺りは漆黒と雨音に閉ざされる。すぐに行き当たった廊下の果てで、ぶつかる様にして戸を開けた。
「松野さん！」
今度は、幾つもの灯火が光で満たす中で呼んだ。
紺羅紗の制服に身を包んだ人影が、驚いた様子で居間から飛び出す。
「……死にました」
誰が、とは質されなかった。
松野の動きは素早かった。たった今自分が逃げ出して来た暗闇の中へ、ダッと駆け込む背中を見送る。
そうだ、医者を呼ばなくては。斉庵はどの部屋だったろう。などと、すっかり回転の鈍った頭でのろのろと考えた。
「誰か！」
やっと呼ぶと、すぐに階段の左上で戸が開き、何事かと磯村が顔を出した。すかさず彼を捕まえて医師を呼ぶ様に頼んでから、きつく握り締めたままだった燭台に眼を落とす。松野の後を追うために、火を点け直した。
再びゆらゆらと、しかし今度は急ぎ足に火影を揺らして廊下を進む。すぐに薄暗い中に、巡査の姿を見付ける。蝋燭一本の頼りない明りに照らし出されて、彼はふっと顔を上げ、そして首を横に振った。
ああ、やはり。
改めて、胸の中が冷たく翳る。
バラバラと階段を降りて近付く幾つもの足音を、背中で聞いた。
それが到着する前に、巡査は室内でも被ったままの帽子に手をやっ

て、ボソリと零す。
「これは、面倒な事になる……」
ああ、誰もこの時まで。
本当に何かが起こるとは、思っていなかったのだ。

二ノ一

この夜に、眠りに就く事が出来た者は少なかった。
全くいなかった訳ではない。
烔平は自室で眠っていると秋良は言ったし、騒ぎを察して起き出して来た者の他は、使用人を起こす事もしなかった。
けれども流石に殆どの人間はぱっちりと眼を冴えさせて、「まさか！」と言う思いを抱えて朝を待った。
居間に揃った客達を、松野が見張る。
客達は不安のため、あくまで自主的に居間に集まっていた。だがそうでなければ、都祁が一ヵ所に集めていたかも知れない。
これは両面的な意味を持つ。
一同を保護する事と、犯人を逃がさない事と。
犯人の、存在する可能性があった。
殺人の可能性が。
何故か？
俺達を松野に監視させ、一方で都祁は斉庵を立ち合わせて死体の検分を行った。その上で生じた疑惑。
冷たく硬くなる平五郎の体は、戸口から奥向きにやや長方形の洋室の中、入り口に近い場所で倒れていた。戸口に頭を向けた、うつ伏せの格好で。片手を頭の上に伸ばし、助けを求めんとするふうに。
足の向く先には小型の卓と、揃いの椅子。一脚しかないそれは、平五郎が引き倒したか、卓の傍に倒れていた。その椅子。布を張った背凭れの下に、硝子の破片が散らばっていたと言う。
硝子は卓上の水差しに、蓋を兼ねて被せてあった茶碗が砕けた物らしい。しかし水差し本体は一向無事で、卓にトンと載っている。
破片は椅子の下にしか見付からず、椅子を倒すより前に茶碗だけが割れた事になる。ならば茶碗に注いだ何かを口にして、体に深刻な変調をきたしたものではないだろうか。

少なくとも俺は、それを聞いて毒殺の二文字を思い浮かべた。
勿論、元気に見えたとは言え、平五郎も年だった。水を飲んでて偶然ぽっくり逝ったと言う事も、ないではない。
都祁も、水差しに残った液体は色、においともに水と思しきそれであったと言っている。
無味無臭、無色透明である毒薬に生憎と俺は心当たりがないが、もしも存在するとして、件の水差しに毒の混入がありやなしやを確かめる、安全な術がここにはない。
毒殺についての追求は、保留となった。
だから夜明けを、居間に集まった人々は黙りこくったまま、一睡もせず迎えた。
秋良、大内、磯村、斉庵、井葉、裕洞、津和踏、俺。そして都祁と松野。それから、使用人は女中と下男が一人ずつ同席した。
使用人は全部で四人と、最初に秋良が言っていた。その内に男は下男の正富(まさとみ)だけで、後は女中のスミ、ミツ、エイとなる。今ここにいるのはスミだそうだ。
――何故、都祁は家人を残らず全部起こして、居間に集めなかったのだろう。
確かに若年でしかも病の令嬢と、女中を二人ばかり自由にさせて置いた所でどうと言う事もない様に思える。だが、やはり警察の考えだ。犯人を逃がすまいと、そちらにばかり気を取られたのではないか。
「あのぅ……」
誰の声かと顔を向けると、居間の入り口に女がいた。寝間着だ。昨日は芥子色の着物を着て、世話を焼いてくれたミツだった。
「あのぅ」
ミツは寝惚けた様な口振りで、もう一度、誰にともなく声を掛けた。
秋良が眉をひそめる。
当然だ。女中がだらしない寝間着の姿で主や客の前に出るなんて、

あり得ない。スミだって夜中に慌てながらも、ちゃんと小豆色の着物に着替えて出て来ていた。
　これは拙いと磯村が、慌ててミツに駆け寄った。流石にもう羽織袴の格好ではなく、今は灰色の背広に着替えている。昨夜、平五郎の部屋に駆け付けた時にはもうこの姿だったから、どうやらこちらが平素に好む服装らしい。
　気遣わしげな磯村が、寝間着の女中に問う。
「どうしました。そんな格好で」
「はあ、あの……驚いてしまって」
「何です？」
「起きたら、息をしてなくて」
　おっとりと言って、頬に手をやる。若い女中は伏せた眼を横にずらして、今し方目にしたそれを思い出しているかに見えた。
「隣で、エイちゃんが……」
「松野！」
　事態を察した都祁の怒声に、巡査は即座に部屋を飛び出す。部下を走らせたその口で、更に言い渡す。今度は部屋に残った者達に。
「皆様はここから動かぬ様に」
　言われるまでもなく、動こうとしても動けなかった。
　何故。――俺の頭の中には、それだけが浮かんでいた。
　けれども、……ああ、きっと。最も悔やむのは、都祁に違いない。
　磯村は蒼白になりながら、ミツを座らせ、寝間着の肩に自分の上着を掛けてやった。
　その傍にはスミが立ち、色々と声を掛ける。だが自失状態にでもあるのか、何ともぼんやりとミツの反応は鈍かった。
「スミさん」
　俺は少し離れた場所から呼んで、手招きした。自分の腰掛けた長椅子の、すぐ隣をポンポンと叩いて示す。
　やってから気が付いたが、これは昨日、津和蕗が俺にしたのと同

じ事だった。あの時は、こんな事になるとは露程も思っていなかったけれども。
当の津和蕗は別の椅子に腰掛けて、何を始めたのかと推し測る様に、何げないふうでこちらを見ている。
スミは俺の近くまで来ると足を止め、立ったままで言う。
「ご用でございますか」
「うん」
隣に座ろうとしないのは、主人の眼があると言う事だろうか。チラリと窺うと、互いに近い椅子に座った秋良と都祁が、二人揃って不審そうな顔でこちらを睨んでいる。これはちょっと、考えなくてはならない。
俺は少し悩んで、思い浮かぶ限り最も曖昧に聞こえる言い方を選ぶ。
「こんな事を言うと、困らせるかな」
そして注意深く、女中の様子に神経を凝らした。
これは一種、探りを入れるための言葉だった。
この場でするには困る話が、あなたにはあるかな、と俺は訊いたのだ。
返事は応。スミはピクリと、何とも嫌そうな顔を垣間見せたした。
ふーん。あるのか。
それじゃあ、と俺は素知らぬ顔で、くるりと話題の方向を変える。
「こんな時に、所帯染みた話で申し訳ないんですがね。台所やなんかは、大丈夫なのかと思って」
「台所……でございますか」
「そうです。台所。ミツさんは少し休ませてやらないと酷だろうし、でも客も多いしね。食べない訳にも行きません。一人では、大変ではないですか」
「まあ……っ」
俺が心配そうに言葉を切ると、スミは感激でもした面持ちで口元を押さえた。

何と気の付く男だろうと、思っているのに違いない。勿論、誤解だ。台所を手伝えば、主人の眼の届かない所で幾らでも話が出来る。そう言う算段があった。
俺はここぞとばかりに、べらべらと畳み掛ける。
「昔、男所帯の道場で世話になっていた事があってね。仕方なく、賄い方もやらされたんです。余り役には立たないかも知れないけれど、少しは手伝えると思うんだよ」
「ありがとう存じます。ですけれど、正富もおりますし。お客様にその様な……」
「ああ！　待って」
女中が深々と頭を下げて断ろうとするのを、俺は内心慌てて遮った。断られては困るのだ。
「それ、違いますよね」
苦し紛れに言いながら、秋良を見た。
彼は、いかにも訝しげに応じる。
「違うと申されますと？」
「ええと、だから、もうお客とは言えませんよね。昨日、そう仰った。変事の折には、尽力せよと」
「……申しましたね」
「残念ながらこうなった以上は、もう客分として頂く訳には行きません」
我ながら、詭弁としか思えない理屈だった。とても納得したとは思えなかったが、「では、ご自由に」と、秋良は疲れた様に嘆息した。

二ノ二

　そこへ、松野が戻る。
「警部殿」
　難しい顔で、居間に入りもせず入り口から都祁を呼ぶ。部下に呼ばれ、上司が足を運ぶのは妙な気がする。だがどうやら、内密の報告があったらしい。巡査は警部の耳元で、ヒソヒソと囁く様に何かを伝えた。
　都祁は小さく頷き、室内を振り返る。
「斉庵先生、少々宜しいか」
　これは拒否を前提としない問い掛けだった。さっと立ち上がった斉庵を伴い、都祁は一階の食堂側、階段の左下に位置する廊下の戸を開けた。その奥に、使用人のための部屋があるのだ。
　行ってしまった都祁の代りに、松野が残る。すると、それまですっかり大人しくしていた井葉が「ちょいと！」と突っ掛かる様な声を上げた。
「何をこそこそしておいでなのさ」
「その様なつもりはない」
「へーェ、そうかい」
　眉一つ動かさない松野に、井葉は赤い唇を引き攣れた様に歪めた。
「まァた人が死んだんでしょうに。アタシらに教えないってのは、一体どんな道理ですかねェ？」
　俺達はシンと息を詰め、井葉を見た。
　一同は真四角の居間にぐるりと円を作る形で、壁に背を向けて腰掛けていた。その眼が全て、憎形の女を捉えていたのだ。
　井葉自身、それ程の事を言ったつもりはなかったのだろう。そうやっていっぺんに見られて、逆にどぎまぎと驚いている様に見えた。
　しかし、冗談じゃない。
　この女の言葉通り、また死んだのに違いない。この場の誰もがそ

れを承知していたくせに、思うのと言葉にするではこんなに違う。
何て重ぃ。
一晩に、二人の人間が死んだのだ。
「そりゃ、道理かも知れんなぁ」
ボソリと、口を開いたのは大内。
言った傍からあくびして、目尻に涙を滲ませている。こんな時に、よくもまあ。
余計な口を挟む男がいやに静かだと思ったら、この人は今の今まで居眠りをしていたのだ。まだ目覚め切らぬものと見えて、もう一つ気だるげな息を「ふぁ」と吐いた。
その大内を、女祈祷師がキッと睨む。
「何だって？　どこに道理があるってのさ」
「ん、あぁ。違う、違う。道理なのはアンタの方さ」
大内は鷹揚そうにひらひらと手を振り、松野の方へ顔を向ける。
「黙ってられちゃ、こっちだって不愉快だ。こんな間近で人が死んで、理由が解らないじゃ穏やかでない」
巡査に向けて言った顔を、制帽の下からチラリと見やる。松野はどこか、ヒヤリとするものを感じさせる声で応えた。
「理由？　死因がお知りになりたいのか」
そしてこちらは本当に、冷たく鋭利な表情を浮かべる。
「いいでしょう。ただし、自分は医者ではない。今から口にするのは全て私見と、ご承知頂けるのであれば」
「心得ました」
応じたのは秋良。
これには、驚いた。秋良は昨日、初見した時と少しも印象が変わっておらず、どこか泰然と見えていたからだ。けれども今、どうやらそうとも言えないらしいと思い直す。
表面には見えないが、彼だって同じなのだ。例えわずかでも、事実を掴みたい。松野を促したのは、その焦りの表れではないか。
視線を受けて、松野は一度固く瞼を閉じた。その刹那と呼ぶべき

束の間に、ふと微かな苦悩を嗅いだ気がする。
「見た限り、溺死。女中は眠りながらに、水に溺れたのです」
告げられて、誰も口を利かなかった。
ザァザァと。
もう夜は明けたと言うのに、窓外では、いまだ黒い雲が空気を薄暗く染めていた。そして飽きる事なく、激しい雨を降らせている。
一晩中、そうだった。
けれども、溺死？
家の中で、眠ったまま？
そんな死に方が、果たしてあり得るのだろうか。俺は問う。
「根拠はいかに」
「私見である。仏を眼にして、他に言葉がない」
「仮に、窒息と言い替える事は？」
ミツは「起きたら隣で息をしてなくて」驚いたのだ。また松野も、「眠りながら」と限った。つまりエイは、布団の中で亡くなっていたのではないか。
どの様な状況であったのか、現場を見てみなければ厳密には解らない。だが例えば、誰かが頸を絞めて息の根を止めただとか。物騒だがそっちの方が話ははるかに簡単で、ありそうな話だと受け止められるのだ。
けれども松野は、ただ首を横に振った。
人を溺死させるには、桶一杯の水で充分。それくらいは俺も承知だ。だがその死因を成立させるには、何者かの殺意が必要になる。
この場合、その殺意と言うのが曲者だ。
もし俺に殺したい程の誰かがいても、こんな真似は絶対にしない。意味がないと思うからだ。
俺が溺死と見せて殺そうとするなら、川か海。池でもいい、とにかく水の中に骸を捨てる。巧くすれば、事故として片付いてしまうかも知れないからだ。
だが事故死、または自然死を装うつもりがあるのなら、布団の中

に寝かせて置く事だけはしない。今まさに俺がそうである様に、何者かの作為を疑わずにいられないからだ。
それだけに、解らない。刃物や紐の類であれば持ち運ぶのも容易いが、水と言うのは思いの他に扱い難い凶器ではないだろうか。殺人が明らかになって構わないのであれば、溺死にする必要がどこにある。
皆が黙り込んで、それぞれが物思いに耽っているふうだった。その中、秋良がふと立ち上がる。彼の眼は玄関に繋がる入り口へ。
ああ、都祁が戻ったのか。察してそちらに目をやると、人影が二つ。居間に入ろうとするところへ、視線が集まる。
都祁は室内の人々をぐるりと見回し、一言零した。
「……お待たせしてしまった様ですな」
そうしてあとに続く老医師と、意味ありげに眼を交した。
「女中は？」
不躾に問う大内に、都祁が答える。
「やはり、亡くなっておりました」
「溺れ死んだと聞きましたが」
秋良の問いに、俺はギクリとした。
一瞬のち、「ほう？」と視線をずらす都祁に釣られて俺達も松野に眼を向ける。他の誰も巡査の立場を案じる義理はないが、これは拙くはないだろうか。上司にお伺いも立てず、一存で機密事項を漏洩した。
警部は部下を見、難しい顔をする。
「さて、困りましたな」
「お困りになる事はありません。ただ事実を、お聞かせ下されば良いのです」
「事実……と言うのも、中々に定義の難しい話ではありませんかな」
「やはり、溺死なのですか！」
俺は堪らず、都祁と秋良の会話に割って入った。
もしかしたら、松野の語弊かとも考えていた。「溺死」とは言葉

のあやで、ただまるでその様な死体なのではと。
しかし今、都祁の様子に確信した。
きっと紛れない事実なのだ。そうでなくて、一体どこに言葉を濁す理由がある。
すっかり色めき立った俺に向け、都祁は抑えた声でピシリと打った。
「言葉を控えよ」
「しかし、そうなのですね」
溺死は溺死。だが、経緯が見えない。だから口籠ってしまうのだ。現状で何が明らかなのかすら、解らない。
現場を見たい。
何が不可解なのか、この眼で確かめたい。心底思った。けれども、駄目だ。都祁が提案でもしない限り、これは許されない。歯痒さに唇を噛む。
「そう言う、事になる」
ボソリとした呟きで、我に返った。
都祁は四十を一つか二つ越した男だ。年月による苦労と偏屈さに、顔には深い皺が刻まれている。厳しく、慎重な人だ。それだけに、自らの言動には重く責任を持つ。
そんな人物が、俺ごとき若造に指摘される様な矛盾を、そのまま信じるなんてあり得ない。
だが都祁が本当に凄いのは、若輩の意見でも筋が通っていれば認めると言う事だ。
「仕方がない」
都祁は俺を見ながら言った。
「正直に言う事としよう。実際のところ、女中は溺死したものと思われる。しかしながら室内に水気はなく、窓もない。水死させた後に遺骸を運び入れたと断定するにも、そうでないと断定するにも証拠が足りぬ。が、当の女中は布団の中に眠る様に横たわっており、寝具にも寝間着にも乱れはない」

そして、俺が頭の中で至ったのと殆ど同様の不可解さに行き当たった。すっかり惑わされ、いまだ誰にも出口が見えない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4959k/

灯影怪談

2011年5月31日12時20分発行